

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：33908

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12961

研究課題名（和文）古代世界の共同体意識 シリアのユダヤ キリスト教関係を中心に

研究課題名（英文）Communal Consciousness in the Ancient World: Focusing on Judeo-Christian Relations in Syria

研究代表者

大澤 耕史 (Osawa, Koji)

中京大学・教養教育研究院・助教

研究者番号：40730891

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、特に古代世界のユダヤ キリスト教関係において、両者が互いをどのような存在として定義し、描写してきたのかに着目して分析を進めてきた。主にコロナ禍の影響で当初の計画より分析範囲の縮小を余儀なくされたが、シリア教父と同時代のユダヤ人/ユダヤ教については集中的に取り組むことができた。明確な成果としては、例えばシリア教父が「ユダヤ人」に言及する際に、その「ユダヤ人」の定義や行動は著者であるキリスト教徒にとって都合のいいものであり、その境界は恣意的に変動するというのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

そもそも西方キリスト教に比べて扱われることの少ない東方キリスト教を中心的な題材として、その枠組みを疑うところからユダヤ教との比較を行うという点に新規性がある。またそれは本研究の成果を受けて改めて西方キリスト教にも投げかけてみるべき問いでもある。そして共同体の定義づけが時に任意に行われるという本研究の結論は、古代のみならず現代の人間関係も含め他の隣接分野にもそのまま適用可能な知見である。

研究成果の概要（英文）：This study has focused its analysis on how both sides have defined and portrayed each other, especially in the Jewish-Christian relationship in the ancient world. Although we were forced to reduce the scope of our analysis from our original plan, mainly due to the Corona disaster, we were able to concentrate on the Syriac Church Fathers and their contemporary Jews/Judaism. One clear outcome is that, for example, when the Syriac Church Fathers refer to "Jews," their definition of that "Jews" and their behavior are convenient for the author(s), Christian, and the boundaries can fluctuate arbitrarily.

研究分野：ユダヤ学

キーワード：ユダヤ教 キリスト教 シリア アイデンティティー

## 1. 研究開始当初の背景

キリスト教に代表されるように、現代世界の共同体内部の差異は一定程度以上に認識されているとすることができるが、古代世界(4~5世紀まで)についても同様であるとは決して言えない状況にあった。例えば、オリゲネスといった当時のキリスト教世界において特徴ある個人についての研究は進んでいても、集合としてのキリスト教の多様性について語られることは稀であった。この構図は、キリスト教のみならずユダヤ教等その他の共同体についても同様であった。そして、そのような枠組みを前提としてユダヤ教とキリスト教の関係が論じられることは多いが、そこから得られる結論が当てはまるのは、限られた範囲(とそれを敷衍した想像上の全体)に過ぎなかった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、(1)古代世界のユダヤ教とキリスト教の内部の差異、および、(2)両者が自分たちと相手をどのように区別していたのか、を具体的に明らかにすることである。その対象として本研究では、シリア地域(現在の国名であるシリアの国土に加えて、レバノン・ヨルダン・イスラエルやトルコの一部も含む地域とその周辺のシリア語が使用されていた地域とする)の文献精査を中心にそれ以外の地域との比較を行う形で分析を進める。

また、これまでに盛んに行われてきたユダヤ教文献を利用してキリスト教の実態を明らかにする試みとは反対に、本研究は、これまでにあまり行われてこなかった、キリスト教側の文献から逆にユダヤ教伝承の歴史や地域性を特定することも目的の一つとする。すなわち、キリスト教との比較によって、ユダヤ教の実態を明らかにすることも目指すのである。

## 3. 研究の方法

本研究は、(1)ユダヤ教文献における異教徒(特にキリスト教徒)への言及の分析、(2)シリア教父の著作における異教徒(特にユダヤ人)への言及の分析、(3)シリア地域以外のユダヤ教とキリスト教の関係についての先行研究調査とそれに伴う一次文献の分析、(4)上記(1)(2)の成果を(3)と照らし合わせた上での総合的な考察、という四点が中心的な作業となる。

(1): 古代世界のユダヤ教文献(500年頃から編纂が開始された、一大法規集成のバビロニア・タルムードを上限とする)における異教徒の描かれ方についてはすでに研究がなされており、本研究では先行研究の調査とその整理が中心となる。特に、キリスト教がどのように描かれているか、自分たちとどの点が違うとしているかという点に注目し、できる限り多くの事例を集めて分析を行う。最終的には(2)の成果と照らし合わせて、各々の伝承を時間的・地理的に区分することを旨とする。

(2): ニシピスのエフライム(306-373)、ペルシアの賢者と呼ばれるアフラハト(3世紀半ば-345年以降)、バルダイサン(154-222年)、タティアノス(2世紀初-末)とキリスト教の創世期にまで遡って彼らの著作に見られる異教徒やユダヤ人の描写に分析を加える。彼らがユダヤ人をどのように見ていたのかについてはいくつか研究がなされてきたが、本研究ではそれらを総括するとともに、これまでは自明と考えられる傾向にあった両者を分ける境界に着目して分析を行う。

(3): (2)の結果を、すでに一定の蓄積がなされている西方キリスト教世界でのユダヤキリスト教関係およびユダヤ人観についての先行研究と比較し、キリスト教内部の多様性を明らかにする。

(4): 上記(1)~(3)の成果を統合し、シリア地域のユダヤ教とキリスト教の特性、両者の関係および境界を明示することを目指す。また、両共同体が自他を区別していた基準が他の地域の両共同体にも当てはまるかどうかを検討する。

## 4. 研究成果

(1) 古代世界のユダヤ教文献における異教徒の描かれ方について特に「異邦人」と訳されることの多い *goy* に着目したところ、この語が一義的に「非ユダヤ人」に限定されるわけではなく、時にはユダヤ人も含めた広い人類一般をさすこともあるということが判明した。つまり、「異邦人」の分析として様々な文献における *goy* という語の用法を無条件にその対象に含めることはできないということが明らかとなった。このことから、まずヘブライ語聖書における *goy* の用法ごとに場合分けを行い、そのそれぞれにおける二次的な言及を分析するという新たな作業の必要性が生じた。これを踏まえて、聖書時代以降、特に古代末期のユダヤ教の聖書解釈とシリア教父の著作に見られる *goy* の用例の収集したところ、ヘブライ語聖書における意味・用法を忠実に踏まえた言及がほぼすべてであったが、そこから派生してシリア語で *goy* に対応する *'amma/ 'amme* が、*goy* の翻訳ではない箇所でもどのような意味で使われているのかも広く視野に入れておく必要があるという認識に至った。事実、シリア教父の中にはこの語を明確に異なる意味で使い分けている者もあり、著者ごとによる違いも重要な分析要因として認識する必要があることが確認された。

(2) シリア教父アフラハト(3世紀半ば~345年以降)の著作の分析を進めていったところ、彼の著作はシリア教父の分析の立脚点にするのにふさわしく、また古代末期のキリスト教全体を考える際に、いわゆる西方の影響をまだ受けていない純粋に「シリア」の特性を保持しているということが確認された。これに伴い、このアフラハトに続いてエフライム(306~373)やその他のシリア教父の著作の分析を進めるための理論的な道筋が示された。また、アイデンティティーに関する先行研究の調査により、対峙する相手によってアイデンティティー・マーカーが変化する可能性があるという知見を得ることができた。これはすなわち、ユダヤ人が自らのアイデンティティーを主張する際に、キリスト教徒に対する時とその他の「異教徒」に対する時でその戦略が異なるということである。これにより、ユダヤ人に限らずある集団が自分たちのアイデンティティーを述べていると考えられる際には、その記述が誰に向けられているものなのかを十分に吟味する必要があることが明らかとなった。これにより、各共同体の性質をより多層的・多面的に分析することが可能となった。

(3) 京都ユダヤ思想学会の大会にて「誰が「ユダヤ人」とされてきたか」というシンポジウムを企画・開催し、古代・中世初期において誰が「ユダヤ人」とされてきたのかについて、ユダヤ人内部の法規、ユダヤ人とそれ以外の境界線をめぐる議論、同時代のキリスト教徒からみたユダヤ人像という三つの観点から分析を行った。それぞれの観点が非常に有意義な提言がなされ、今後本研究を進める上で重要な「素材」をいくつも得ることができた。また投稿論文として、ヘブライ語聖書中で用いられる多義的な *goy* という語について、まず聖書中での意味を確認し(「民族」「国」「国民」などと訳される)それらがシリア教父のアフラハトの著作『論証』とラビ・ユダヤ教のタナイーム期の文献の中で誰を指す語と考えられているかについての比較考察を行った。その結果、聖書においてはユダヤ人/イスラエルの民を意味に含まないケースでも、『論証』の中では含まれるとして解釈されているケースがあるなど、自分たちキリスト教徒のアイデンティティーを確立するための読み替えが行われていることが明らかになった。逆にユダヤ教文献では、ほぼすべての *goy* を「異邦人」として解釈するなど、ユダヤ人とそれ以外の線引きのためにこの語が使われていたことが確認された。

(4) 『論証』の中のアフラハトの聖書引用における *ama* の使用例をすべて抽出し、古代末期の(ラビ・)ユダヤ教の文献における *goy* の用法との比較を行った結果、どちらの文献においても、聖書で使われている *goy* を、自分たちの陣営にとって都合の良いように読み替えている事例が散見された。このように、自分たちのアイデンティティーを示すために聖書解釈が利用されうることが明らかになった。具体的には、ヘブライ語聖書においては「イスラエルの民」を意味する箇所が、ラビ・ユダヤ教の文献ではそのまま「ユダヤ人」を意味するとみなされる一方で、『論証』では文脈に応じてそれがそのまま「ユダヤ人」を意味したり「キリスト教徒」を意味するようになったりと、聖書の文脈に自分たちをうまく組み込もうという意図が見られた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大澤耕史	4. 巻 13
2. 論文標題 ヘブライ語聖書～第二神殿時代における「ユダヤ人」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都ユダヤ思想	6. 最初と最後の頁 10-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大澤耕史	4. 巻 11
2. 論文標題 「ヨセフは誰に売られたか？」をタルグムから考える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都ユダヤ思想	6. 最初と最後の頁 140-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大澤耕史	4. 巻 15
2. 論文標題 『死海文書』におけるアロン 擁護か批難かー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 一神教学際研究	6. 最初と最後の頁 37-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 OSAWA, Koji
2. 発表標題 Borderline between “Jews” and “non-Jews” as seen in the biblical quotations by Rabbis and Aphrahat in Late Antiquity
3. 学会等名 the 18th World Congress of Jewish Studies（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 OSAWA, Koji
2. 発表標題 People and Goy from Rabbinic Literature and Syriac Christianity in Late Antiquity
3. 学会等名 12th EAJS congress (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大澤耕史
2. 発表標題 ヘブライ語聖書～第二神殿時代における「ユダヤ人」
3. 学会等名 京都ユダヤ思想学会第14回学術大会シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大澤耕史
2. 発表標題 古代世界のユダヤ教の境界意識 「異教徒」「背教者」を中心に
3. 学会等名 日本ユダヤ学会第16回学術大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------